

健康の科学



疫学研究部 七戸研究施設長

濱岡 隆文

HAMAOKA, Takafumi

私たちは、病気や怪我等の様々なリスクのなかで生活を営んでいるが、リスクを的確に認識できる情報とリスク回避に関する情報とを併せ持つことにより、適度にバランスのとれた意思決定を積み上げて、リスクを回避し、または低減しながら生活を維持している。このリスク回避の方法には長い人類の歴史から生み出された「生活の知恵」的なものから、科学に裏打ちされた新たな対処法まで様々である。

牛海綿状脳症(BSE)の経験を顧みるまでもなく、私たち、研究機関の責務の一つには、「試験研究を通して得た科学的情報の社会への還元」により、個々の生活或いは社会全体がリスクとリスク低減措置のバランスをとり安全で快適な生活を維持することへの直接・間接の貢献があろう。動物衛生研究には、動物に対するリスクについてだけでなく、動物・畜産物が関与する人に対するリスクについても、より直接的対応が求められている。つまり「動物を守る、人を守る」である。

今、家畜の疾病問題がクローズアップされるなか、食の安全・安心が叫ばれ、「健康」が同義語のように溢れている。安全な畜産物を生産するために健康な家畜を育てるという極当たり前の課題が社会ニーズとして畜産全体に課せられ、健康的なものには一定の付加価値を認める傾向も強い。集約化による高生産性を追求してきた近代畜産の中であって、生産性を犠牲にした「健康的自然回帰派」が、希少価値も手強い、高付加価値製品として経営を成り立たせている例がある。消費者は自然で健康的なものに安心という価値を認め、コスト負担にも「肯定的」なので

ある。これを象徴的成功事例に止めることなく、より普遍的で産業ベースで受け入れられる基盤を作るためには、脱農薬、脱薬剤、脱化学肥料など一極の象徴に偏ることなく、科学的に「健康」とどのように向き合うのかを考える必要があるのではないか。

「健康」とは?という問いに対し、広辞苑には「身体に悪いところがなく心身がすこやかなこと」とある。単純に言えば、心も体も病気でない状態であろうが、これを科学的に説明する、或いは規定し評価するのは難しい。つまり、何を測れば「健康」を測れるのかが明確でないのである。私たちは病気を専門とし、病気を診断することに関してはそれなりに自負もあり、実績もある。では、「健康」を診断することについてはどうであろうか。

「病気でない家畜」は最低限の責務であり、一歩進んで「健康な家畜」を作ることが、動物衛生にとどまらずオール畜産分野としての私たちの課題である。今、畜産は安全・安心だけでなく、自給率向上、環境負荷低減など様々な社会的課題に直面している。これらを解決するためには動物衛生も含め畜産各分野が協力することが不可欠である。これには畜産各分野が個々の役割分担をしっかりと自覚することが成功への第一歩である。私たちは「病気の科学」の視点に加え、更に「健康の科学」へ視点をひろげて発展させ、畜産各分野と連携することで、消費者に堂々と必要なコスト負担をお願いできるような科学に裏打ちされた「健康な家畜・安全な畜産物」をたくさん届けられる畜産を構築しなければと思う。